JRA 患者における運動の影響

福岡大学小児科　小　田　禎　一

〔方　法〕

9例の JRA 患児(うち2～5才4名，6～10才5名)について，日常可能なかぎり最大限の運動を行わせ，経過を観察した。なお，機能障害程度 (class) は1が3名，2が5名，3が1名であった。また，病期 (stage) は，Ⅰが8名，Ⅲが1名であった(Steinbrocker 基準による)。

〔結　果〕

上記のうち，リハビリテーション期間内に CRP が持続的に陰性であったものは1名だけであった。

Stage Ⅲ の1名を除いて，全員正規の体育，運動会，登山，遠足，水泳等に参加させたが，それによって活動性および関節症状が悪化した例はなかった。

10才男児 (class 2, stage Ⅰ, 全身型) では，下熱後赤沈促進，CRP 陽性が持続したが，登校させ，積極的に運動させた。しかし，18キロ遠足，自転車遠足，マラソン，キャンプ，1,000m 級の登山でも，関節症状 (右足，右手) が悪化することなく，むしろ次第に軽快した。アスピリン，イブプロフェン，パンテチンの持続投薬を減量すると，間もなく右足関節が腫脹し，赤沈が促進したが，再増量によって軽快した。この例では，症状の再燃は運動と無関係で，薬剤減量によるものと結論された。

Stage Ⅲ の例も，積極的な体操，ぶらさがり器などで毎日リハビリテーションを行っており，不自由ながら元気に登校している。

〔結　論〕

JRA 患児は，急性期を除いて，高度の運動をさせることが可能で，赤沈促進，CRP 陽性，中等度の痛みは運動の禁忌とならない。また，運動によって症状，検査所見が悪化する例はみられなかった。

若年性関節リウマチ患者の心理調査

東京共済病院小児科　藤　川　　敏
日本大学小児科　大　国　真　彦
　　疋　田　博　之

〔緒　言〕

若年性関節リウマチ (JRA) は慢性経過をとりその約1/3 は成人の慢性関節リウマチに移行し，数年～数十年間の治療を必要とする。この間には入院を反復し，関節機能障害，変形も伴い，手術を要する例も多い。

その結果，通常の学校生活，社会生活は限定される。このため，うつ状態，不安状態，ヒステリーなどの精神障害が出現することも当然予想される。

本研究の目的は現在および将来，免疫に対して大きな不安をかかえている子供たちがどのような心理状態にあるかを調査し，予想される精神障害を予防するための指導方法を検討する。

〔対　象〕

日本大学板橋病院小児科および東京共済病院小児科で治療した JRA 患者および他の膠原病患者を対象とした。

〔研究方法〕

下記の6種類のアンケートおよび心理テストを行った。また心理テストの分析は日大心療内科の心理療法士に依頼した。

1.　アンケート調査 (表1)

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔結論〕JRA 患児は,急性期を除いて,高度の運動をさせることが可能で,赤沈促進,CRP 陽性,中等度の痛みは運動の禁忌とならない。また,運動によって症状,検査所見が悪化する例はみられなかった。